

## 古丁と「大東亜戦争」

——大東亜文学者大会と三つの作品をめぐる

梅 定 娥

はじめに

一九一四年、長春に生まれた作家古丁は、一九三二年に北京大学に入学し、左翼作家連盟北方支部のメンバーになった。その後、長春に戻り、「満洲国」で官吏をしながら文学活動を行っていた。日本語に堪能な古丁は、中国人作家と日本人作家が活躍していた「満洲国」文壇では中心人物であった。「満洲国」が崩壊して一九四九年に中華人民共和国が成立した後、一九五八年に右派と目され、歴史反革命罪で逮捕された。一九六四年、五十歳の若さで病死。一九七九年になってようやく名誉回復された。このような複雑な経歴を持つている作家古丁は、愛国的か、反動的か、今に至るも中国の研究の間で、結論が出されていない。<sup>1)</sup>

一九九五年六月、瀋陽春風文芸出版社から『古丁作品選』<sup>2)</sup>(李春

燕編集)が出版された。付録として中国、日本、台湾の研究者の解説が付されている。『古丁作品選』の「評古丁の文学成就(代序)」の中で、馮為群氏はこう書いている。

偽首都警察庁特秘発一四一四号秘密文書の中に左翼文学の未来の方向を分析する時、「古丁、山丁らは沈黙を守っているが、たまに文章も発表する、と発見した」と書いてある。当時他の大多数の作家と同じ古丁も愛国抗日作家だ。

ここでは馮為群氏は、古丁の名前が警察の秘密文書に載っている、警察に監視されている、だから、古丁も愛国抗日作家だと結論している。そして、鉄峰<sup>3)</sup>が、古丁の文学的功績と貢献を認めながらも、古丁が偽満洲国の官吏として勤めていた、三回にわたる大東亜文学

者大会に参加したなどの「満洲国」や日本に協力した事実を挙げて、「古丁の政治的立場が反動的だ」と言っているのに対して、馮為群氏は「特殊な歴史条件下で、文章を書くために、そのように調子を合わせなければならぬ」「文学創作と政治的立場は切り離すことが出来ない」と反論する。しかし、その反論が「かならずしも説得的とは思えない」と、日本の中国文学研究者岡田英樹氏は言う。<sup>(4)</sup>岡田氏は古丁の短編集「奮飛」、長編「平沙」、そして『古丁作品選』に選ばれていない古丁の自伝的小説「新生」<sup>(5)</sup>などを分析し、

たしかに古丁は、満洲国文芸政策を立案し、実施にうつす先頭にたっていた。その発言のなかから国策追随、日本協力の痕跡をひろいあげることにはたやすい。しかし、上記実践的啓蒙者としての視点から、かれの発言と行動をながめてみると、少し別のものがみえてくる。<sup>(6)</sup>

と結論する。古丁の政治的立場をめぐって、反動的か、愛国抗日か、言い換えれば、古丁の対日協力は本心からなのか、ただの調子合わせなのかが争点となっている。そして、岡田氏の意見は、古丁には国策追随の一面もあるが、しかし、実践的な啓蒙者としての一面もある、と古丁の二面性を指摘するものである。

本論では古丁を研究する場合、愛国的か、反動的か、という二分

法で分析すれば問題が解決できるのか、また、古丁の中で協力と啓蒙という二つのことが、はたして矛盾するものだったのか、を検討したい。とくに古丁が「大東亜戦争」に協力した実態にアプローチしようと思う。

古丁は一九四四年一月『芸文志』<sup>(7)</sup>第四号に「新生」、九月『芸文志』第十一号に「下郷」、一九四五年七月『文友』（上海）に「山海外経」<sup>(8)</sup>を発表した。「新生」に「民族協和」、「下郷」に「聖戦完遂」、「山海外経」に「鬼畜米英」というモチーフが表れ、「大東亜戦争」への協力の姿勢が明確に読み取れる。そして、大東亜文学者大会での古丁の発言、さらに報告にも「大東亜戦争」への協力姿勢が読み取れる。本論では、まず第一章で『古丁作品選』に見られる作家古丁の姿勢を分析し、第二章で、古丁の大東亜文学者大会での発言と報告を検討し、第三章で「新生」「下郷」「山海外経」の三作品を通して作家古丁の思想の変化を分析する。<sup>(9)</sup>

### 第一章 『古丁作品選』に見られる作家の姿勢

『古丁作品選』の中には古丁の短編小説集「奮飛」「竹林」、長編「平沙」、雑文集「一知半解集」「譚」、日本語からの翻訳「魯迅著書解題」が収録されている。選集なので、もちろん古丁の作品の全部ではない。時期的に言うと、一九三三年（吉生）から一九四二年五月（竹林）までの間の主な作品で、それ以後のものは収録され

ていない。

当時の古丁について、辛嘉が一九四〇年『滿洲浪曼』第五輯に「古丁に就て」という評論文を寄せている。

彼はこの圈内に入つて来た時、甚だ鋭い調子を帯びてゐた。

「大寂寞を衝き破り、大荒原を馳騁する」ことを高く叫んだ。

(一九三七年五月に書いた「大作家随話」)「紅樓夢別本」式の鴛鴦蝴蝶派の文章を攻撃し、新文學に一條の血路をひらくに努めた。<sup>10)</sup>

文壇に登場したばかりの古丁の「鋭い」調子はその雑文集に見られるだけではなく、小説の中にもよく表れている。

### 1 農民像

農村に題材をとった小説「玻璃叶」(一九三六年七月九日作、一九三八年三月六日改作)は蚕を飼う農民、霍二虎の一家の悲惨さを書く。政府の規制で蚕を食べる鳥の退治にも洋鉄砲は使えないし、繭の価格が低落し、一家は村の人々と同じように食糧がなくなり、老父老母と子供が死に、霍二虎の妻は身を売り、二虎自身は乞食となるまでを語っている。

「変金」(一九三七年一月)は、胡子(匪賊)の乱で、自分の土地を

離れた農民葛福が主人公。彼は異郷の地で地主である親戚から田圃を借りて友人と一年間力を尽くして耕作し、願ひ通りの豊作の年を迎えるが、借金とその利息、税金などを出してしまふと残りがほとんどなく、来年の耕作のためにまた新しく借金しなければならぬありさまとなる。小作農になつてしまつた葛福は絶望のあまり狂人のようになつてしまふ。

「暗」(一九三七年七月三日)は、農民の美貌の未亡人が、悲しい思いをしながら、一人で耕作して生きていこうと決意するが、村の権力者に狙われ、妾として拉致されたことを描いている。

この三篇の農村題材の作品は、いずれも当時「滿洲国」の農民たちの苦難に満ちた生活の現実を暴露するものであるが、それぞれ少し違う所もある。「玻璃叶」は近代工業の衝撃と当局の規制による農民の破産を書いているが、それに対して、「変金」と「暗」は、地主と村の権力者を登場させ、農民たちがいかにその人たちの圧迫によつて酷い目にあつたかを物語っている。「農村の動乱の原因は単に匪賊に帰しては物足りない、他の内的な原因——地主の小作農への略奪関係、人のせいで延長された天災、農村に居座っている高利貸……」と後の二篇には農民・農村没落の村の内部の対立が書かれている。

## 2 平民像

「奮飛・小巷」と「竹林・花園」では都市の平民の生活を書いていく。「小巷」のタイトルのすぐ下に『三字経』の「人之初、性本善」が抜きだしてある。小説の主人公、金花は、誰も目もくれない年とった娼婦で、その夫は食べ物がないため、ついに泥棒に走ってしまった。この農村から都市へ流れてきた二人の善良な人間は、社会に蹂躪され、飢えに耐えられず「悪人」に転じてしまう。

「竹林・花園」には、天真爛漫な子供、大鼻涕が花園で花を取り、その花を売って父のモルヒネ代にする。その父は人間と思われないほど大鼻涕をいじめる。結局、大鼻涕はそのような父から逃げて浮浪児となる。花園で幸せに送るべき大鼻涕の幼年期がモルヒネの中毒者の父によって奪われてしまうのである。

## 3 知識人像

青年知識人もよく古丁の小説には登場する。「教育することは高尚なことだ、一生を教育事業に貢献したい」と考えていた吉生（「奮飛・吉生」一九三三年十月一日脱稿、一九三八年二月二十七日改作）が、「毎日生気のない生活をして」「私には別の道があるかと思って、模索して、長い間模索しているが、目の前に真っ黒な暗闇」しか感じられず、とうとう肺病で死んでしまうという不幸を書いている。

「奮飛・皮箱」（一九三七年四月十日）には、淑やかだが、気が強い

妹哲の悲劇を書いている。結婚した哲は夫が日本へ留学するまではしばらく幸せな生活を続けていた。が、日本に行った夫から手紙が来なくなり、彼女は他の男性と恋におちた。しかし、「旧礼教の制限を、いくら考えても、飛び越えることができない」彼女は、死を選んだ。「ボールが壁にぶつかると、跳ね返されるが、壁はびくとも動かない。壁を破ろうとすれば、爆薬を使うのでなければ、鋭い刃物が必要とする。さもなければ、ボールは跳ね返されるだけで、壁はびくとも動かない」。根強い旧礼教の犠牲者となった女性の物語である。

「奮飛・原野」（一九三八年二月十四日）に登場する錢経邦は、東京に留学して帰郷して、家の中の「封建」に耐えられなくなる。「若旦那つてこの言葉が『封建』なのだ！（略）箸も封建的だ、銀の箸が何だつてんだ。（略）便所も封建的だ！」。ところが、仕事のため、生活のため、彼はこの「封建」の家に頼らなければならない。彼の職場の上司は「夏の蠅」に過ぎないが、彼自身は毎日仕事らしい仕事がないため、結局上司のようにつまらない恋愛をしたり、古代「性生活」研究に没頭したりするようになる。近代教育を受けた錢経邦は、現実の暗黒面をはっきり見ているが、それを離れることはできない。彼は周りの人と同じように、社会に役立たない「味を失った塩」になってしまう。だが、これらの人物に作家は夢を預け、奮って飛び上がろうとしていた。

卵が石を破った夢を見た、水が炭を燃やした夢を見た、夜に太陽が出る夢を見た、冬の日に春の花が咲いている夢を見た。

そして、

私は夜を昼とし、灰を炎とし、飢餓を満腹とする。私は寂寞の中で騒ごうとし、冷酷の中で発熱しようとする。

また、

飛び上がるかとすれば、往々足が折れるかもしれない、だが、それにしてもかまわない、彼はやっと翼を振るって飛び上がったのだ。<sup>13</sup>

しかし「平沙」あたりに来ると、「彼は些か疲れてゐるやうで」<sup>14</sup>あり、鋭い調子がかなり緩やかになってきた。新文学の「血路を開く」ことはなかなか容易なことではないのだろう。「平沙」では、現実の暴露だけではなく、社会や人生の哲学を追究するようになった。ところが、かつて留学→博士→教授を夢見ていたその主人公、白今虚は、現実の中で夢が破れてしまい、現実をはっきり見ていながら、何もせず「骨や血がない人」になってしまふ。

#### 4 日本人像

『古丁作品選』の中に、日本人は登場しない。登場人物の話の中に時に日本人のことが出てくるが、いいイメージのものではない。

その院長夫人が時々彼女を虐めるから、彼女はやっと逃げ出したのだ。院長夫人は「(病院での仕事を)やめるなら心一(心一とは哲の夫である——筆者)に知らせる」とまで言って彼女を脅かしていた。<sup>15</sup>

ここでは「院長夫人」は日本人だとはっきり言っている。そして、はっきり言っていないが、社会背景と小説のコンテクストから日本人のことだと推測できる小説もある。「平沙」の中で新京に戻った白今虚の心境について、次のような議論がある。

だが、これらすべての新しいものも、やはり土と砂とで造られてゐたのだ。(略)彼は、この濃艶な顔料を塗った土と砂の中に、彼が期待した新しい靈魂と智慧とは發現し得なかつた。彼は大半の住民がやはり卑俗と賤しさの中にあるのと感じ取つた。彼はこの新と舊との間の溝が、實に深く、また寛いものであることを知り、この餘りにも深く餘りにも寛い溝を埋め平らにせねばならぬ、少なくともそれを浅く、狭くしなければなら

ぬと思つた。(略)

彼は此処にもやはり自分の舞臺はないと感じ、身を以てやつて見ようとした雄圖は、又しても脆く砕け去つてしまつた。<sup>(16)</sup>

この「新しい」や「新」は、当時の新京の街の建設を指しており、その建設を主導しているのは、疑いもなく日本人である。卑俗と賤しさの中にいる大半の住民はもちろん「満人」で、「旧」の代表としての彼らと、「新」との間には広い溝がある。言い換えると、日本人が持つてきた近代文明が、現地の住民に影響を与えず、住民からかけ離れている。白今虚はそこで「新しい靈魂と智慧」が発見できない。「新」と「旧」の間の溝を埋めるべきだと思ひながら、埋めようともせず、そこには自分の舞台がないと感じ、「雄図」がもろく砕けて去つていく。彼は「新」から「旧」へ逃げ込んでいたのである。彼は自分が「新」より「旧」の群れに属していると思つていたからである。

以上見てきたように、『古丁作品選』の中の小説は、社会の暗黒面を暴露し、社会に圧迫された農民・平民・知識人の苦悶ないし悲惨な生活を描いている。初期の小説には作者の「奮つて飛ぼう」という意欲がみえるが、後期になると、作者が疲れるようになり、人物像もますます頹廢してしまい、社会にいてもいなくても変わらぬ、あまり役に立たない存在となる。それにしても、この時期の小

説に日本人の登場人物がほとんど出てこず、小説の世界が日本人から独立したものとなっている。それゆえ、「満洲国」や日本に協力する傾向は少しも見えない。

『古丁作品選』の中に収録されているのは、一九四二年までの古丁の作品であり、それ以後の作品は全く収録されていない。一時期の作品だけではその時期の作家の行動や心境しか見えてこない。だが、時間は流れているし、歴史も常に變動している。「満洲国」の状況や日本の政策も常に変わっている。作家古丁の考えも行動も多かれ少なかれその影響を受けて、次第に変わつてゆくと思われる。『古丁作品選』に収録されていない一九四四年以後に発表された三作品には、古丁の「大東亜戦争」への協力姿勢がはっきり見られる。それらについて見る前に、古丁の「大東亜戦争」への協力の姿勢を示す言葉を見ておこう。

## 第二章 大東亜文学者大会についての古丁の言論

### 1 時代背景

古丁の大東亜戦争への協力の姿勢は、大東亜文学者大会に臨んではっきりしている。まずその時代背景を見てみる。

一九三七年七月、日中全面戦争が始まり、十二月には南京が日本に占領され、国民政府は重慶に遷都した。一九三八年十一月三日、近衛内閣が「国民政府と雖ども拒否せざる旨の政府声明」を発表し、

東アジア、東南アジアに「共存共栄」の「新秩序」構築の構想を打ち出した。一九三九年十二月三十日に汪精衛集団が日本政府と「日華新関係調整要綱」を結び、一九四〇年三月三十日、南京に「国民政府」を樹立した。その後、「和平、反共、救国」を掲げる汪精衛政権が、「青年思想を指導するため、東亜聯盟運動を大いに」行った。<sup>(17)</sup>

日本の東亜連盟論は「満洲国」建国に発端をもち、範圍を日・滿(後、華が入る)とし、「八紘一宇」の中で「王道主義」「民族協和」を実現することが目的とされる。その実現条件は「国防共同」「經濟一体」「政治独立」とする。汪精衛政権の東亜連盟運動は、「国防共同」「經濟一体」「政治独立」の「政治独立」をいちばん最初に持つてきて、その重要性を説く。日本政府に対しては汪精衛政権にもっと独立を認めるように求めている。この東亜連盟運動は、日本占領区で官民一体運動となり、かなり大きい影響をもたらした。

汪精衛政権成立後、「満洲国」と閩内の間は印刷物や情報が自由に行き来するようになった。それゆえ、閩内のこの東亜連盟運動は「満洲国」に伝えられており、古丁ら知識人は東亜連盟や東亜連盟運動をよく知っていたと考えられる。

一九四一年十二月八日の真珠湾攻撃により、日本はアメリカとの戦争に突入する。それ以来、日本海軍は勢いづいてタイ(一九四一年十二月)、香港(一九四一年十二月)、マニラ(一九四二年一月)、そ

して一九四二年二月十五日にシンガポールを占領した。戦争の最初の段階では、日本が主導権を握り、戦況を順調に進めていった。このような戦勝が、日本の「内地」にも「外地」にも大きい影響を与えた。浅見淵の『満洲文化記・滿支見聞記』の一節には、当時の「満洲国」民衆の日本に対する態度の変化の一つの側面が窺える。

(製薬会社の満洲宣伝部長)「しかし——」といつて、香港、マニラが落ち、新嘉坡が陥落するに及んで、目に見えて彼等(「満洲国」の中国人——筆者)は次第に日本に對して畏敬の念を持ちだして来たと、眸を輝かせながら物語った。日常の素振りに何となくそれが現はれて来たといふのだ。ハワイ海戦、マレイ沖海戦の場合は、日本の宣傳だらうと疑ひ深い彼等はまだ信じなかつたが、香港が落ちると同時に、以上の嚴たる事實を漸く認めだして来たらしいのである。<sup>(18)</sup>

そして「満洲国」では、一九四一年三月二十三日「芸文指導要綱」が発表され、「満洲国」の文芸政策がいつそう厳しくなる。同年七月二十七日、満洲文芸家協会が設立され、八月二十五日に満洲芸文連盟が発足する。一九四二年一月八日に新京で「芸文家愛国大会」が開催され、「満洲国」のほとんどの作家が「大東亜聖戦」に「奮って翼賛」するように要求される。このような動きの中で、い

ちばん先頭に立っているのは、「満洲国」の「満人」作家代表とみなされている古丁である。古丁は満洲文芸家協会の委員で、一九四三年五月の文芸家協会改組後、審査第二部の「満文」の役員となり、大東亜連絡部の部長となる。

一方、日本では、一九四二年に大政翼賛会が設立され、日本文学者の一次的な組織、国策の実行・普及・施行実践に協力する公益法人、日本文学報国会が創立された。そして、「日本文化の真姿を認識せしめ、且つ共栄圏文化の交流を図って新しき東洋文化の建設に資せんとするものである」<sup>19</sup>ため、この文学報国会は、一九四二年の最大の企画として、大東亜文学者大会を開催した。古丁は一九四二年十一月から一九四四年十一月まで三回にわたるその大東亜文学者大会に参加し、いわゆる「大東亜戦争」に協力する言論を数多く発表した。

## 2 大東亜文学者大会について

大東亜文学者大会については、尾崎秀樹の『旧植民地文学の研究』<sup>20</sup>、櫻本富雄の『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』<sup>21</sup>などいくつかの先行研究があり、詳しく論じられている。確かに「戦時下の文学者たちは侵略戦争を推し進めた国家の要請に便乗して見事に踊ってしまった」<sup>22</sup>が、しかし、文学者一人一人の「踊り」ぶりはそれぞれ違う。その違いを一つ一つ分析する必要があると思う。

そして、中国からの参加者は必ずしも「踊り」に行ったわけでもない。上海代表として第二回大会に参加した関露、また第三回大会の参加者陶晶孫は、中国共産党の地下党員であることがわかっている。ここで、三回の大会の議題と「満洲国」からの参加者について整理しておく。

第一回大会は一九四二年十一月三〜十日、東京・大阪で開かれた。議題は①大東亜精神の樹立、②大東亜精神の強化普及、③文学を通じての思想文化の融合方法、④文学を通じての大東亜戦争完遂に就いての方法、であった。満洲国代表として古丁・爵青・バイコフ・山田清三郎・小松・呉瑛が参加した。第二回大会は決戦文学者大会とも言われ、一九四三年八月二十五〜二十七日、東京で開催された。議題は①決戦精神高揚、②米英文化撃滅、③共栄圏文化擁立、④以上の理念を實踐する方策、である。満洲国代表として山田清三郎・大内隆雄・古丁・呉郎・田兵が東京を訪れた。

そして、第三回大会は一九四四年十一月十二〜十四日、南京で開かれ、議題は①如何にして小説、詩歌、戯曲等を以て士気を激励し戦意を高揚し、大東亜戦争に協力且つ英米を駆逐し以て大東亜民族の解放をはかるや、②如何にして東亜固有の文化及び精神を復興すべきや、如何にして新しき東亜文化とその精神を創造すべきや、③如何にして大東亜宣言第三項に關係ある文化各事項を積極的に実行すべきや、④如何にして大東亜諸民族の文化水準とその民族意識を



高揚すべきや（桜本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』）である。そして満洲国代表には山田清三郎・古丁・爵青・小松・竹内正一・石軍・疑遲・田魯等八名の名前が見える。

「満洲国」の代表として、大東亜文学者大会に三回も参加したのは、山田清三郎と古丁だけである。ここで取り上げたいのは東京で開催された第一回と第二回大会である。第一回と第二回では「満洲国」の代表として古丁が発言したし、分科会で提言もした。また東京で、古丁は多様な座談会に招かれ、「朝日新聞」や文芸雑誌に彼の発言も出てくる。ここでは、主に大会での発言を検討の対象にする。

### 3 古丁の第一回大会での発言と報告

#### ① 第一回大会での発言

今や大東亜聖戦は親邦日本が遂行してゐるのでありますが、わが満洲國は、北邊の鎮護に任ずるものであります。従つて文學においても、わが満洲國は、この北邊鎮護の任務を一刻も忘れないのであります。

御承知のやうに、わが満洲國は協和して道義世界の實現を期しつゝあるのですが、この崇高にして且つ美はしい建國精神の淵源は、實に親邦日本の肇國精神たる八紘一字の理念に発してゐるのであります。<sup>(23)</sup>

古丁の発言は長くなかった。その長くなかった発言の中に、親邦、北辺鎮護、肇國精神、協和、道義など、「満洲国」の「建国十周年ニ際シ賜リタル詔書」（一九四二年三月一日）や「満洲国基本法大綱」（一九四二年十二月八日）に出ている言葉が並んでいる。古丁がこれらの言葉を口にしてゐるのは、如何にも「満洲国」の代表という身分に相応しいが、それらの言葉を盾に彼自身の考えを述べることを避けているとも考えられる。

わが満洲國と致しましては大東亜精神、即ちアジアを興す精神は、わが満洲國の建國の精神に帰着するものであります。

（略）御承知のやうにわが満洲國は約二十種の民族が結合してゐます。その民族が過去における鬪争の歴史を清算して、今や實に美はしい民族協和の光景を現はして居る次第であります。

御承知のやうにわが國はその根本を惟神の道に定めて居り、この惟神の道が即ちわが満洲國の建國の真髓でありまして、われら文學者も従つてこの國家の根本議に則つて文學を致して居る次第でございます。<sup>(24)</sup>

これは「大東亜精神の樹立」という議題での発言であるが、古丁の「大東亜精神」に対する理解は、「満洲国」の根本が惟神の道に定められており、それが即ち「満洲国」建國精神「民族協和」であ

ると理解している。それに対して、朝鮮代表の香山光郎（李光洙）は、

自己の総てを 天皇に捧げまつることを日本精神といふのであります。また 天皇におかせられて慈悲を行はせ給ふことを皇道と申すのであります。(略) われ／＼はこの 天皇を翼賛申し上げながら死ぬものである。私はこの自分を完全に捨て、自分を総て捧げるといふ精神こそは、大東亜精神の基本でなければならぬと存じます。<sup>(25)</sup>

という発言であった。また北京から来た代表、『万葉集』の研究で有名な銭稻孫は東亜文化には三つの鼎があるという。

その第一には、わが中華民国は四海兄弟の精神をもつて居ます。又日本は八紘為宇といふ精神を持つて居られます。それから更に第三には一蓮托生。この三つの精神をもつて、お互ひに一視同仁と思つて今後進んで行きたいと痛切に考へてゐます。元来西洋文化は利益を本としてゐます。これに反し、わが東洋文化は道義を本としてゐます。<sup>(26)</sup>

「満洲国」は日本を親邦とし、「民族協和」を唱えている。それは

古丁の日本精神に対する理解となる。すなわち、日本の「八紘一宇」を「満洲国」の「民族協和」と理解するのは古丁の独創ではない。香山光郎（李光洙）の発言には、創氏改名や皇民化政策が厳しく行われている朝鮮の人の屈折した心理が潜んでいる。そして、銭稻孫の儒、神、仏三つの精神の一視同仁を強調するというのは、彼の日本精神に対する理解というより、日本に対する希望のようにも思われる。これは、汪精衛政権が夢見ている「政治独立」と一致するし、日本占領区の中国人の独立要求を表している。ここに、日本が朝鮮・満洲国・汪精衛政権に対して取った政策が違つたため、それぞれの地域の人々の反応やリアクションが違つて浮き彫りになっている。それぞれの地域の代表が、自らの国や地域の歴史と社会状況から、「日本精神」を理解する。その受け止め方は違つたが当たり前だろう。社会背景から見ると、「満洲国」の古丁の「民族協和」と北京から来た銭稻孫の「一視同仁」に共通点があることは不思議ではない。

## ② 第一回大会の報告

乃其是关于「大东亚精神的树立」我想、在确立大东亚文学者的世界观上、诚然有了很大的成效。大东亚精神、当然在于发探我东方固有的道德和真理、但是、却要归一在皇道上、即日本的

肇国精神の八紘一字为我大東亜精神の淵源。此点已为全大東亜文学者代表所认识、所理解、实在是此次大会上的收获。<sup>28)</sup>

これは古丁が「満洲国」に帰って、大会の様子を報告した文章である。中国語原文の一部を、日本語に訳すと、以下のようになる。

「大東亜精神の樹立について」の議論は、大東亜文学者の世界観の確立に誠に大きく役立った。大東亜精神とは、勿論わが東洋の固有の道徳と真理のことである。が、大東亜精神は皇道、即ち日本の肇国精神の八紘一字に帰せられ、それをわが大東亜精神の淵源とする。この点について、全体大東亜文学者代表が既に認識、理解した。これは確かに今度の大会の収穫である。

そして、最後のところで「満洲国」文学者に対する希望も出されている。日本語に訳すと、以下のようになる。

終りに、わが満洲の文学者たちは、この固い決意と大勇猛心を持ち、わが満洲文芸を建設することを希望し、これをもってこの大東亜文芸建設に寄与しようと呼びかける。(略)わが満洲の文学者は、大東亜文芸史の新しい展開に注目しながら、訳したり、書いたり続けて努力して行ってほしいと思う。

この報告は第一次大東亜文学者大会の精神をそのまま伝えている。また、「大東亜文学者代表が既に認識、理解した」という言葉が使われていて、客観的な報告の態度が守られている。作者本人の考えや、感情が表出されていない。そして、中国語の原文に「但是」「却要」という逆接の言葉が二回重ねて使われ、大東亜精神を皇道に定めるということが作者によく理解されて快く受け入れられているとは読み取れない。文章の最後の呼びかけは、古丁の一貫した主張であり、特別な気持ちが進められているとも思えない。

以上述べてきたように、第一回大会での古丁の発言は、国策の言葉を口にし、彼自身の意見を表していない。第一回大会の報告には、客観的な報告の態度が守られていて熱意が読み取れない。古丁は「満洲国」の代表として大東亜文学者大会に出席し、発言もしたし、大会の精神にそって報告もした。「民族協和」などの言葉も口にしていない。これらの言論には、いずれも、本人の感情が込められていない。これらから、古丁は国策や「大東亜戦争」に協力しているが、最初から熱心に協力したわけではなく、彼の態度には留保があるように思われる。

#### 4 古丁の第二回大会での発言と報告

##### ① 第二回大会での発言

亜細亜の解放は今や現實となり、大東亜戦争の必勝並に大東亜共栄圏の達成は大東亜人に確約されて居るのであります。この大東亜興隆の乾坤一擲の重大局面に際して、私共文学者は一層その任務の重大を自覚し、撃ちてしまむの大勇猛心を奮起し、米英的文化を撃滅し、大東亜文化の建設に邁進しなければならぬのであります。精神的戦力の増強における文學の役割は重かつ大なるものがあり、アジアへの復帰は大東亜戦争の勝利によつて始めて得られ、大東亜文學の樹立は大東亜戦争への文學的戦力の増強によつて始めて期し得られるものと確信致します。<sup>29</sup>

以上引用した第二回大会での発言の内容そのものは第一回大会のものと同し大した違いがないが、注目すべきなのは、「亜細亜の解放は今や現實となり、大東亜戦争の必勝並に大東亜共栄圏の達成は大東亜人に確約されて居るのであります」というところである。そして第三分科会では、「日本精神の大東亜への浸透乃至は日滿華の文化的文學的交流」のために大東亜翻訳館のような国家的常置機構を設立すべきであるという実際的な提言もした。

文學、文化による大東亜精神の確立、日本精神の大東亜への浸透乃至は日滿華の文化的文學的交流は昨日菊池議長がいはれ

ました通り理論ではなく、作品を書くといふ実践によるべきであり、その作品を漢語を常用語とする最大多数の滿華の人達に滲透するには、翻譯活動による実践に俟たなければならないものと存じます。<sup>30</sup>

翻訳という言葉は「滿洲国」ではより複雑な意味を持っている。汪精衛政権が樹立される前、「滿洲国」と関内とは分断され、出版物の往来が許されなかった。もちろん左翼作家の「旗手」魯迅の著作を直接関内から「滿洲国」に入れることはできなかった。それで、古丁はかつて「魯迅著書解題」という、日本の魯迅研究者の文章を中国語に翻訳して、「滿洲国」で出版した。

文學の歴史がない「滿洲国」では、如何に文學を發展させるのか、それが当時の文學界の大きな話題となった。滿洲文學が古典に還るか、翻譯作品を豊富にするかについて、古丁は「伝承の必要を忘れてはゐない」と言つてから、さらにこう続けた。

佛典の翻譯が曾て支那文學に寄與したやうに、翻譯文學も滿洲文學に寄與し得るであらう。古典に還へる、翻譯をやる、どつちが滿洲文學の急務であるか、私は矢張り後者を急務だと思ふ。機會ある毎に滿洲國に於いて國立編譯館の如きものを置いて、一大國家的な事業として日本其他諸外國の文化を紹介する

事に就て愚見を述べて居つたが、そのこともかういふ意味で言つたのである。<sup>31)</sup>

また、大内隆雄は、『芸文志』第八号に載つた田郷の「満洲文學的誕生」の第四章を訳して「満系は翻譯を求めている」というタイトルで『満洲評論』に発表した<sup>32)</sup>が、その中では「満洲文學は當面の問題は、いかにしてその傳統を發掘するか、或ひはその傳統を承け繼ぐかでなくて、いかにしてその傳統を建設するかである。」と述べられている。外国文學や文化の翻譯は、満洲文學の内容を豊富にし、満洲文學を成長させるためである。そして、古丁たちも日本作家の作品の翻譯紹介を積極的に行っている。それに対して、第二回大東亜文學者大会で提言した翻譯館の設立は「日本精神の大東亜への浸透乃至は日滿華の文化的文學的交流」のためとされる。この目的なら、念願の翻譯館は政府による設立が可能かもしれないと古丁は希望を持っていただろう。また、漢語による実作と翻譯の主張には、当時、台湾、朝鮮半島で行われていた、いわゆる皇民化政策は受けつけない、という態度がこめられているとも考えられる。また、翻譯については、それまで「満洲文學の急務」とされてきた。それはあくまでも自分たちの文學の内容を豊かにするためのものであった。が、ここでは、第一に日本精神のため、第二に文學より文化が広がっているためである。その点に違いが見られる。<sup>33)</sup>

## ② 第二回大会の報告

我々は何のために決戦せねばならぬか、それは我々が勝利を獲得せねばならぬからである。我々は何のために勝たなくてはならぬか？ 我々は東亜を光復せねばならぬからである。

我々は大東亜戦争の必勝を信ずる。(略)

我々の文學はもうあの米英の文學の侵害を受けてはならぬ。

(略) 換言すれば、米英の文學は完全に鬼畜の文學である。

(略) 我々はかの米英の鬼畜の文學を必要としない。我々は人間を描いた文學を必要とする。我々は新しい大東亜の神話を創造せねばならぬ。

亜細亜は一つである——(略) 我々は自己の文化を愛するが故に、更に日本の文化を愛する。日本の文化を愛するが故にまた自己の文化を愛する。何なら亜細亜は本来一つであるからである。(略)

我々は決戦を必要とする！勝たなくてはならぬ！勝利の後も、なほ続いて決戦しなくてはならぬ！勝て！我々は大東亜文學の榮譽を万代までも続けなくては成らぬ！<sup>34)</sup>

以上は第二回大会の「満洲国」での報告の一部である。第一回のものと比べたらずいぶん長くなっている。そして前回使われていな

かった言葉「東亜を光復」「大東亜の神話」「大東亜文学」などが数多く使われている。そこから作者が「大東亜共栄圏」を意識して、「大東亜共栄圏」の立場に立って発言をしていると分かる。次に注目したいのは、文章全体が問答の形で書かれており、「大東亜戦争」について平易な言葉で詳しく分かりやすく説明していることである。そして、文章の最後で「全国の文学者たちよ！君の筆を握り、この歴史的偉業に参加せよ！大東亜の詩篇を創造せよ！」と呼びかけている。文章の中で並んでいる驚嘆マークから、作者の高ぶった気持ちを感じられる。

以上をまとめてみると、第一回大会と第二回大会での古丁の発言の内容には大した差はないが、二つの大会報告はだいぶ調子が違う。前回は客観的な報告に終始しているのに対して、後者は、「大東亜共栄圏」の立場に立ち、熱意が込められている。ここから、古丁が第二回大会の時から「大東亜戦争」にかなり積極的に協力するようになったことが分かる。このような変化は古丁にだけ表れたわけではない。大東亜文学者大会の「満洲国」作家代表団の引率者で、かつての左翼作家の山田清三郎も自身の変化を書いている。

第一回大東亜文学者大会のときには、私は発言らしい発言はしなかった。またその気もなかったのである。第二回るときには、私はいい気な気焰をあげたものだった。<sup>(35)</sup>

その変化の理由は何なのだろうか。主な外部原因として日本の政策の変化があげられる。

一九四三年一月九日「中華民國ノ主權尊重ノ趣旨ニ基キ」日本と汪精衛国民政府の間に「租界還付及治外法權撤廢等に關する日本國中華民國間協定」が結ばれ、形の上で上海租界を中国に還付した。日本はこのことを汪精衛政権に対する主權尊重として大々的に宣伝していた。同じ日に汪精衛政権は米英に対して宣戰布告をして、日本と「生死を共に」する態度をとった。これで、米英は、日本と汪精衛政権の中国、それから「満洲国」の共同の敵となった。また、一九四三年八月一日に日本はビルマ（現ミャンマー）の将来の独立を認めた。

以上のような日本の一連の政策によって、形の上で、汪精衛政権の独立が認められ「東亜新秩序」が現実に近いとき、「大東亜共栄圏」の理念すなわち「民族解放」があたかも実現してゆくように思われる。古丁は、これらのことを信じ、それで第二回大会の発言に「亜細亜の解放は今や現實となり、大東亜戦争の必勝並に大東亜共栄圏の達成は大東亜人に確約されて居るのであります」と言ったのだらう。

古丁は大東亜文学者大会に参加し、「大東亜戦争」に協力したが、最初から積極的に協力したわけではなかった。ところが、第二回大東亜文学者大会から積極的に協力するようになったのは、彼が「大

東亜共栄圏」の夢想が実現できると判断したためと考えられる。では、彼の協力実態は、どのようなものだったか、その協力はどのように行われたのか。次に彼の協力三作ともいえる「新生」「下郷」「山海外経」を分析してみたい。

### 第三章 「民族協和」「聖戦完遂」「鬼畜米英」

三回の大東亜文学者大会は、毎回議題は少し違うが、底流する精神はほぼ同じである。日本精神の樹立、聖戦完遂、米英撃滅などがキーワードとなる。前に述べたが、もう一度、古丁は「日本精神」を「満洲国」の「民族協和」と理解していたことを確認しておきたい。

#### 1 「新生」から見る「民族協和」

「道徳仁愛ヲ以テ主ト為シ、種族之見國際之争ヲ除去セム」<sup>(36)</sup>「凡ソ新國家領土内ニ在リテ居住スル者ハ皆種族ノ分別ナシ」<sup>(37)</sup>は「満洲国」の建国精神「民族協和」のもともとの意味であるが、古丁にあっては、民族協和がどういう意味を持っていたのだろうか。前に述べたように、一九四二年までの古丁の小説の中には、日本人との関わりや日本人のことが正面から書かれたことはなかった。また、直接「満洲国」に対抗する「満人」も、「満洲国」の政策を謳う「満人」も登場していない。これらの小説で主に問題視され

ているのは、「満洲国」制度下の漢民族自身の思想と生活で、リアルに描かれたのは「満洲国」の漢民族の「封建」と近代文明の衝突に耐える無力な民衆の必死な闘いと喘ぎである。このような古丁の小説は淪陷区の抵抗小説の一部と見なされている。

一九四〇年十月、新京で疫病ベストが流行し、古丁の家の近辺に擬似死者が出てきたため、古丁一家は近隣の人たちと一緒に千早隔離病院と寛城子病院に前後一ヶ月近く隔離されていた。隔離病院から出た古丁は、「譚・談三夢境」<sup>(38)</sup>の中にこう書いている。

退院してから、友人たちは喜んでくれたが、私は大きな悲しみに陥った。私が乗り越えたのは死線であるから、人生についていかに「清談」しても、なかなか理解されない。わたしは完全に大きな孤独に陥ってしまう。今日まで、私の言動は、私の普通の友人に反対されている。

それまでの古丁には「大きな悲しみに陥った」経験が一回ある。それは、北京から故郷の長春に戻った時。「それ以来、私は殆ど絶望な状態に陥った、忘却と滅亡を求め、アルコールに浸って今日を消耗し、明日のことなどさらに思い出せない」<sup>(39)</sup>これらの文字から、逮捕されて仲間を裏切った、かつての左翼青年の絶望と自己嫌悪の気持ちを読み取れる。この苦悶の挙句、「満洲国」の官吏となった

古丁は、出世することを考える代わりに文学を選んだ。では、二回目の大混乱、すなわちペストでの隔離生活は古丁にどんな変化をもたらしたのだろうか。

前に述べたように、古丁はこの一ヶ月近くの隔離生活を小説「新生」に書いた。「新生」は古丁の自伝的な小説と見られ、この小説の内容を考察すれば、古丁の精神的な変化を把握することができる。小説のはじめに、ペスト恐慌の中で、ペストが鼠に宿っている蚤によって伝染するものだ、と主人公の「私」が隣人の靴の修理屋に一生懸命に説明しているが、理解して対応してもらえるところか、相手にもされなかったことが書かれている。そして、

私は腹が立ちながら可笑しいと思った。しかし、笑うことが出来ない。なぜなら、私は我々の科学に対する認識の距離を如何にして縮めようかと考えているが、方策が出てこないからだ。

ここで、科学に無知な「満洲国」民衆の姿が浮かび上がってくる。また千早隔離病院の中で、食事の時、一緒に隔離されている日系患者は並んで給食を待っているが、満系の患者はご飯の奪い合いをする。「私」は日系に倣おうと提言したが、耳を貸してくれる人はいない。結局「私」の家族の二人分のご飯は誰かに取られてしまう。それでも、「私」の努力で、人々はやっと日系と同じように、奪い

合いをせずにご飯を食べるようになる。

秩序、これは文明の象徴であり、いつでも秩序を保たなければならぬ。たったこれだけの些細な秩序の維持にしてもそれだけ日数がかかった！我々は彼ら（日系人）の秩序に敬服しなければならぬ。

日系の良好な秩序をみて、満系が倣う。

公益優先、何處にでもいつでも、これは必要な市民精神である。我々の市民はこの精神を欠落しているといわざるを得ない。

また、寛城子病院のトイレに行けば、「他人の便所に行ってはいけない、さもないければ、出所できない」という内容が書かれた紙が貼ってある。それについて、「私」はこう思う。

我等の衛生観念を徹底的に正すとするなら、我々自身の民度を高めるべきで、他人の誰かを恨むことではないのである。

科学に無知、秩序を守ることを知らない、市民精神を欠いている、衛生観念がない、民度が低い、これは「新生」の中に登場する満系



民衆の姿である。「満洲国」の官吏でありながら、知名作家としての古丁は、ふだん満・日文化人の中で立ち回っていて、同じ町に住んでいても満系民衆と全く付き合いがなかった。この隔離生活は彼に強い衝撃を与え、それをきっかけに、満系民衆の実状がはっきり分かるようになった。隔離病院で、満系民衆が、トランプで賭けごとをしたり、些細なことで喧嘩したりするが、「大先生」の「私」は、これらの民衆と全く共通の言葉を持たない。それと対照的に、日系人の隔離者甲野さんと秋田さんとの間には、タバコなど生活用品の助け合いによって、友情を築いてきた。

また、千早隔離病院で、日系は白米、満系は高粱というようにご飯を別々に与えられている。ふだんは高粱を食べていない「私」も同じように高粱のご飯を食べさせられる。

このことについて、日系の医者がこのように「私」を慰める。

あなたは高粱米を食べなれていないでしょう。しかし、あなた一人だけに特別に白米を与えることが出来ないのです。そうすれば不公平ですから。

この医者の理屈は、日系が白米を食べるのは当たり前だが、あなたは満系だから高粱をしか食べられないのだと簡単にまとめられる。しかし、公平不公平というような言葉を使って説得しているの

で、言われた人は反論の余地がなく認めるしかないだろう。寛城子病院に移ってからやっと白米が与えられるようになったが、「日本の服を着ているからこそ日本飯を食べさせられる」と言う人もいるし、「民族協和」と言う人もいる。

そして、「私」は名前ではなく、「日本語が出来る人」と日系看護師に呼ばれる。「満洲国」作家の第一人者と見なされる「古丁先生」は日本ではチャホヤされているが、この千早病院で、満系であるため、民族差別を受けなければならぬ。これは古丁に与えられたもう一つの衝撃だと思われる。民族差別が確かに存在している。が、満系民衆の落伍的な生活習慣も確かに存在している。差別されて心は痛むが、民衆の無知にも心が痛む。だから、「我々自身の民度を高めるべきで、他人の誰かを恨むことではないのである」という結論は、心痛を伴いながら出されたものなのだろう。民度の低さを認め、それを高めようとする、その意欲が強ければ強いほど、心の痛みもひどくなるだろう。

ペストは結局抑えられ、古丁の家族は命も財産も助かった。それは「満洲国」政府の防疫のおかげである。「私」は「労苦を辞さずに警戒している警察」、頻繁に消毒する従業員、ただの七日間の市民生活のために子供用のグラウンド、浴室などの施設まで整える「満洲国」政府に感服している。古丁がこの事件についての「満洲国」政府のやり方を認めていると分かる。

この防疫工作から得たいちばん大きい教訓として古丁はこう書いている。

今回の防疫は迅速で順調に終わったといえるが、このことから我々が得た教訓は勿論一つだけではない。一番大きい教訓としては、我々は民衆に啓蒙工作を充分に行なっていないことである。私は往々ここまで考えると、文学の無力を感じる、少なくとも、文学の力が直接に作用できない。文学はそれぐらいだろうと、文学人の存在意義の希薄を感じる。文学人はそれぐらいでいいだろうが、文化人乃至社会人として広げてもっと広い範囲内において考えれば、我々はもっと広い分野で活動しなければならぬことになる。

ここで古丁は、民衆の啓蒙が十分に行われていないことに文学の無力を感じ、文学の社会的効用を疑う。そして文化人の責任を自覚する。古丁が一回目の精神大混乱の挙句、文学を選んだと言えるなら、二回目の混乱は文学の効用を疑い始めた、と言えるかもしれない。古丁にとって、文学の力を疑うということは、どんな意味を持っているのだろうか。

かつて魯迅が日本で医学を捨てて文学を選んだのは、文学のほうが遅れた中国の民衆の精神を治すことにいちばん有効な薬だと信じ

ていたからである。一九三二年、左翼作家連盟北方支部に入った古丁は魯迅の影響を受けた<sup>(4)</sup>。その時の古丁は北方左連の機関紙などの編集にも携わっていたが、彼の文学活動はほとんど翻訳に留まっていた。「満洲国」に戻った彼は、文学についてこう述べている。

私はかつて何回も文学の故郷から遠く離れ、気が向くままに逍遙していた。『原野』と『平沙』の間に、一度このようなわがままの逍遙があった。この逍遙の中で、その地の豪華と気ままの快さを味わいながら、まもなく疲れと郷愁も感じるようになる。それで私はまたこっそり文学の故郷に戻ってきた。私は戻ることのできる故郷があることを喜んでいる。<sup>(4)</sup>

私がこれらの食べ物にも着るものにも心配がない人物を描く目的は、彼らのような人生を肯定するためではなく、同じく食べ物にも着るものにも心配がない読者たちに自ら反省改新の念を起こすことを望んでいるからである。<sup>(4)</sup>

以上の引用からみると、古丁にとって、文学は疲れと郷愁を感じる時に戻ることのできる故郷である。そして、古丁の文学の目的は読者たちに自らの反省改新の念を起こすためである。「転向」の傷を負い、「満洲国」に戻った古丁にとっては、文学を通しての社会

との戦いは、彼の追求でもあり、慰めでもあるだろう。だが、ペスト騒ぎでずっと追求してきた文学の目的はまったく達成していないと分かった。文学に対する疑いは彼自身の社会に対する役割への疑いと同じであると思われる。だから、彼は「(文化人は)もっと広い分野で活動しなければならぬ」と思うようになったと考えられる。

「私は自分の力に任せて歩く、自分の力を愛して歩いていく。一步も油断してはいけない、一步も油断してはいけない。」<sup>44</sup> 隔離病院から出た古丁は、公職を辞し、友人たちと芸文書房を創立、出版活動に従事する。このことは、彼のいわゆる「広い分野での活動」の一つとなるだろう。では、文学の社会的効用を疑い始めた古丁にとっては、満系民衆の民度を高めるために、どんな方法が有効なのか？ また、彼の「普通の友人に反対される」言動とは、何なのだろうか。

「同舟共済。(略) 私は応対する。「我々は民族的偏見を捨てたからこそ、今回のペストを順調に抑えられるようになったのだ」

「そう」秋田老人がもう一杯飲んだ。「苦難に遭遇した時、民族と民族は協力同心でこの苦難を乗り越える、というのは今回私たちが得た大きい結果だ」

「確かに東亜の大和民族と漢民族は、こういう運命共同感を抱

かなければならない。我々は、人種、地理、歴史などの面においても、このような共同感で繋げられているという、この信念を固めなければならぬ。」私は彼から盃を受け取り、一気に入に飲み干した。

「その通り。今回のようなペストは民族を問わず、あらゆる人間を襲撃する。言い換えれば、我々二つの民族はペストという同じ敵を持っている。運命が同じだけではなく、生死を共にしているのだ。我々は一緒に死線を突破したのだ！おめでとう！おめでとう！」秋田老人も幾分興奮してきた。<sup>45</sup>

古丁が寛城子病院の隔離所で秋田さんと甲野さんと一緒に酒を飲んで話している。漢民族と大和民族が偏見を捨てて、運命共同体の感覚を持ち、苦難を乗り越えなければならない、と三人が感想を語り合う。民族協和すべきという結論が出てくる。「満洲国」には、「種族の見」も、「種族の分別」もある、現実に民族平等は不可能で、民族差別は目に見える。古丁はそれを踏まえてあえて民族協和を唱えている。

この時のペストの教訓から「満洲国」の現状に対して、満系民衆の民度を高めるために、民度が高い大和民族と協和してやっていくのは、有効な手段の一つと古丁が考えていたと思われる。「平沙」の白今虚は、広い深い溝で隔たった「新」と「旧」の間に居場所を

見つけることができず、「旧」に引き戻してしまつたが、「新生」の「私」は、「旧」の深刻な問題を心得ながら、積極的に「新」に近づき、「新」の力を借りて「旧」を改造しようとしている。また、「新生」の執筆時期の文化、政治状況の中で、対米英戦争が既に始まっているので、漢民族と大和民族にとって「苦難」というのは、作品の中ではベストであるが、現実では米英との戦争となり、この戦争に勝つために、漢民族も大和民族と一緒に戦わなければならないという含意が読み取れないわけではない。

以上述べてきたように、古丁は「新生」で、はじめて「民族協和」を謳うようになった。彼にとつての「民族協和」は漢民族と大和民族の「協和」である。「民族協和」は彼の一貫した追求——民衆の精神を高めることには矛盾していない。むしろ、「民族協和」は、「満洲国」の現実の中で、彼の追求を実現させる一つの方法と考えられていたのである。

## 2 「下郷」から見る「聖戦完遂」

汪精衛政権は米英に宣戦布告をし、「大東亜戦争」に参戦する。これにより、日本・「満洲国」・汪精衛政権の「運命共同体」が結成される。それゆえ、この戦争はもう日本だけの戦争ではなくなり、中国・「満洲国」の民衆の戦争ともなっている。「大東亜戦争は實に東洋興亡の一大聖戦であり、日本がこの戦ひに勝つことは、満洲国及

び支那が栄えることであり、日本がこの戦ひに勝たなければ、満洲国及び支那が衰へ、英米の奴隷と淪落するのである」<sup>(46)</sup>、日滿華の共同の敵として米英を撃滅するために、全力をあげて戦争に協力しなければならぬ。日本と汪精衛政権が軍隊を戦場に送っている。「満洲国」は「北方鎮護」の責任を負っているので、軍隊を出していないが、大豆・米などの資源や物資の供給をしなければならぬ。小説「下郷」には、「満洲国」の純朴な農民たちが、いかに「聖戦」を理解し、協力しているかを描いている。

「下郷」の語り手「私」は、協和会のメンバーで、役人や教会など他の教化団体のメンバーと一緒に農村へ集団出荷について「宣撫」に行く。小説の舞台は新京特別市近郊の村で、季節は桑の木の葉っぱが赤く、高粱の穂が黒くなる時期である。行く先は静かな村の小学校である。その校門の前に掲示板があり、町より五、六日遅れるが、「大東亜戦争」の戦況が伝えられている。そして、この農民たちは「聖戦」の状況に関心を持っている。役人たちは皇帝の命令を伝え、農民の出荷協力の重要性を特に強調する。純朴な農民たちは水害、布不足、出荷用ナンキン袋不足、馬車用潤滑油欠乏など深刻な問題を抱えているが、政府の困難や「聖戦」の意味をよく理解して、ついに、あらゆる困難を克服して全力で「聖戦」に協力するという決意をした。そういうモチーフの小説である。

①夕飯の時間になると、完全に暗くなってきた。油灯が点って、みんな今日の感動を語っている。農民たちは本当に戦局の要求を理解していて、一心同体で国策に協力しているのだ。これは我が満洲国の協和政治の偉大な成果である。

②チキンの煮込みは我々都会人がなかなか味わえない味である。(略) 椎茸と鶏の煮込み、卵の炒めもの、豆腐の炒め物、木耳の炒め物、卵スープ……

③この老主人には建国は如何にありがたいことだろう。その事件について詳しく聞く時間がないが、建国前、長春市内で昼間にも匪賊による強奪事件が起こっていたことを考えると、現在は本当に平和な時代になったと思う。

④涼しくなってきた。まもなく新京には大勢の馬車が農民たちの一年の血と汗の結晶を運んでくるだろう。

これらの粒々は米英を撃滅する弾丸となり、わが大東亜の最後の勝利を語るだろう。

①は「私」たちの政策が農民に感動されることを述べ、「これは我が満洲国の協和政治の偉大な成果である。」と「満洲国」協和政治を謳っている。②は農民の家の、ごちそうと思われるほどの美味しい料理を詳細に書いている。同じように料理の内容を詳細に記述した所がほかにまたいくつもある。それによって「満洲国」の農民

がゆたかな生活をしていることを示そうとしていると思われる。③は「満洲国」建国のおかげで平和な時代になったと謳っている。④は集団出荷の重要性と農民たちの聖戦勝利への役割を述べていると言える。

『古丁作品選』には「玻璃叶」「変金」「暗」と三篇の農村を題材にした小説が収録されている。前に述べたように、いずれも農民の苦しい生活、悲惨な運命が描かれている。「下郷」の舞台も農村であり、登場人物の多くが農民だが、以前の小説に描かれているような苦しい、悲惨なイメージがほとんどない。農民たちの問題がすべて解決されているわけではないのだが、小説の中に描かれた農村には静かで落ち着いて楽天的な雰囲気さえ漂っている。全力をあげて「聖戦」に協力する純朴な農民の姿に読者が感激するように書かれているのである。

### 3 「山海外経」から見る「鬼畜米英」

一九四四年十一月十二〜十四日、南京で第三回大東亜文学者大会が開催され、「満洲国」から古丁等八名の代表が参加した。そして、『東北現代文学大系(一九一九〜一九四九)第一四集資料索引巻』によると、十一月十九日、山丁、爵青が上海新聞研究会記者訓練班で報告し、二十二日、第三回大東亜文学者大会に参加した「満洲国」代表が華北作家協会のメンバーと、華北新報社で座談会を開いた。

その座談会の中心議題は、大東亜文学者は「文学報国」でつながるというものであった。また一九四五年四月に南京で出版された『戦時文学選集』に爵青の作品が収録されたという。これらを考えるならば、古丁のこの「山海外経」の上海での発表も「文学報国」交流の一環と思われる。

古丁のこれまでの小説はリアリズムの手法で現実社会を表現していたがそれに対して、「山海外経」のいちばんの特徴は、中国の奇書『山海経』の題名を借りて、寓話の形で空想の外国の奇怪な風俗を語っていることである。人物の名前（田舎公は田舎者で、市井徒は都市住民、この二人は東亜人民の代表として描かれていると考えられる。）や物語の舞台（商売城）などの設定も寓意的で、この小説はストーリーを語るより、風刺的な色合いが濃い。

商売城では何をしても金を出さなければならぬ。住民たちはみんな金を食べる口を持っている。人々はいつも何かを売ったり買ったりしている。何も売るものを持たない人は、汗を売る。金銭を離れたら人間関係はほとんど成り立たない。

その市民は海賊の子孫であり、海賊記念日もある。この日の行事として、「海賊幼稚園」ではアヘン擁護競技会が行われる。麻薬のアヘンを売ることの幼児期から子孫に教えるのだ。町には、「新資源館」がある。「新資源」として「奴膝」「笑顔」「麻痺」「散漫」「卑怯」と名づけられた人形は、瓜皮帽や弁髪に馬褂長袍、つまり

清の時代の中国人の恰好をしている。そして、「貪婪」「残酷」「戯言」という「新神経」があり、町民がそれを「新資源」に植え付けようとする。このような「新神経」を植えつけられた「新資源」がアヘンを買ってくれるからである。

町の長官は邱祥爾で、邱吉爾（チャーチル Sir Winston Leonard Spencer-Churchill）の一族だという。この長官は、最初社交の場で田舎公と市井徒にアヘンを勧め、買わせようとする。そして、断わられると、銃を持つ男たちが待ち構えている裁判所で二人に何かを売らせようとする。相手が売るものもないと分かり、長官は、二人の血を吸い取ってしまう。

「新資源館」を見た田舎公、市井徒の二人は、「見れば見るほど腹が立ち、かならずや東亜十億の人民を糾合し、この『新資源館』なるものを叩き潰さねばならないと、心に誓うのであった」と書かれている。血を吸い取られた二人は、またこんな会話をかわす。

「夜のうちに出かけよう……」市井徒は身を起こした。

「道が見えないじゃないか。」

（略）

「これは道のようにだが、東の方に行く道だ。」

「おう。」

北斗星は、ますます明るい光を放っていた。

二人は手を取り合って、用心しながら進んでいった。

以上から見ると、田舎公と市井徒の二人が東亜の人間の代表であり、商売城はイギリスを代表とする帝国主義社会であるという設定だとわかる。帝国主義社会の人間関係は金銭関係で、町の繁栄は海賊の略奪の上に築かれている。彼らは銃を持って強制的にアヘンを売りつけている。彼らは「新資源」の「奴隸」「笑顔」「麻痺」「散漫」「卑怯」を発見し、中国にアヘンを売り込む。イギリスと中国との関係は、搾取―被搾取、略奪―被略奪の関係である。

でも田舎公と市井徒の二人は東亜に帰ろうとしている。二人は血を吸い取られ、英米帝国主義の本質をはっきり認識し、東洋に帰ろうとしているのだ。作家は英米文化に影響を受けていた東洋社会には、東洋回帰する時期が来ていると言っているのかもしれない。

だが、作家は英米社会の金銭的人間関係、物質主義を風刺する手法を通して批判していると同時に、中国人の奴隷根性など国民性をも辛辣に批判している。中国人は「麻痺」「散漫」などの性格を持っているからこそ、アヘンを売りつけられるのである。

アヘン戦争を題材として、「大東亜戦争」に協力する映画の製作や演劇<sup>(48)</sup>の上演も行われていた。これらの映画や演劇は「米英を撃滅」というモチーフを掲げ、米英を敵とする「大東亜戦争」完遂に協力していると思われる。

古丁のこの小説は、イギリスを代表とする資本主義社会の人間関係、帝国主義国家と後進国の中国との間の搾取―被搾取の関係を描き、アヘン戦争などを経験してきた中国民衆の米英に対する敵愾心を掻き立てていると思われる。そういう意味で、この作品は明らかに「米英撃滅」の路線に沿っている。

#### 4 「新生」「下郷」「山海外経」それぞれの性格

「新生」は「民族協和」、「下郷」は「聖戦完遂」、「山海外経」は「鬼畜米英」とそれぞれのモチーフで書かれており、「大東亜戦争」に協力している。上海で発表された「山海外経」と、「新生」「下郷」とでは、発表の場も読者対象も違う。「満洲国」と上海は、日本との関係にも違いがあり、「大東亜戦争」で果たした役割も違う。日本を親邦とする「満洲国」は、北辺鎮護の責任を負う。一方、上海を管轄している汪精衛南京政権は、「大東亜戦争」にも参戦しているし、独立した国家の形となり、日本の「友好国」である。「下郷」は「満洲国」協和会のメンバーの立場に立って書かれたものであるが、「山海外経」は直接の読者が汪精衛政権治下の中国民衆と想定され、汪精衛政権側に立って書いたものといえる。また、この小説の中に「東亜十億の人民」という言葉が出てくるが、「下郷」の中のように、日本や「聖戦」などのような言葉は出てこない。この点においても「下郷」と「山海外経」は違う。「下郷」が日本の

「聖戦」に協力していると言えるなら、「山海外経」は「大東亜戦争」に参戦した汪精衛南京国民政府に協力していると言える。

また、「満洲国」では、権力者の日本人と被統治民の漢民族との間の「民族協和」も唱えられている。それで「下郷」には、日本人の登場人物もいるし、「聖戦」に協力するという言葉も出てくる。すなわち、「下郷」は「満洲国」や日本を意識して書いたものである。また、古丁の大東亜文学者大会での発言や、後期「満洲国」で発表された作品の中では、「満洲国」をずいぶん意識しているが、「山海外経」にはそのような意識のはたらきがほとんど読み取れない。

「下郷」は「大東亜戦争」中の「満洲国」の農村の集団出荷について描いている。その中に登場した農民たちは、純朴で、「聖戦」に協力している。農民たちは笑い、楽天的な雰囲気を描く。これは、知識人や農民などの苦しい生活や悲惨な運命を描き、「暗い」といわれたそれまでの古丁の小説内容と違い、従来の古丁の作風から外れている。この作品は国策に沿って「聖戦」に協力するために書かれたもので、それを書いていた時、古丁の中にある程度無理があったかもしれない。一方、「山海外経」の中には、中国人の遅れた国民性への批判が再び見られるようになる。これは「新生」に通じて、「原野」「平沙」にも遡る、古丁の一貫したモチーフと言えよう。このような国民の遅れた根性に対する批判が、上海の読者に共感を

呼び起こすのである。

もう一つ指摘したいのは、小説を書き上げた日付「乙酉年四月在新京」についてである。

『古丁作品選』の中に収録されている古丁の作品も、末尾に小説完成の日付をだいたい記している。例えば「変金」の最後に「一九三六年九月十七日作成 一九三七年一月二十五日改作」というようにほとんど西暦で表示している。日本の雑誌で発表された文章には「満洲国」の元号「康德」を使ったものが見られる。だが、この「山海外経」の末尾には西暦も「康德」も上海の人が使っている「民国」も使わず、「乙酉四月在新京」という干支の日付による表示法を取っている。

古丁が一九四〇年七月に浅見淵に贈った詩の中に「我乃黄帝子」(私は黄帝の子孫であり)という一句がある。「山海外経」を書き上げた時間は日本敗戦直前の一九四五年四月で、「満洲国」という偽りの国の崩壊が目に見えるようになっていた。この干支の日付によって、「私は読者の皆さんと変わらず中華民族の子孫である」、また「私の中華民族の心は変わっていない」、というメッセージを出しているようにも読み取れる。

## 結論

古丁は「大東亜戦争」に協力した。最初は調子合わせて表面だけ



の協力であったかもしれないが、次第に積極的な強力な姿勢を見せるようになった。一九四四年以後、「新生」で「民族協和」、「下郷」で「聖戦完遂」、「山海外経」で「鬼畜米英」を謳い、「大東亜戦争」文化戦略に沿った小説を発表した。これは明白な事実で誰も否定できないことである。だが、古丁の立場は終始「満人」＝中国人の立場に立っている。彼には自分の民族を捨てて、日本側に付いて行くという姿勢は見えない。また、彼の協力は、香山光郎（李光洙）のように日本人になりきって日本人の立場に立って協力したわけでもないし、汪精衛政権のように東亜連盟論を唱えながら協力したわけでもない。古丁には古丁なりの追求がある。それは文学の夢である。文学を通して、読者の反省改新を促そうとしている。それによって、民族精神、民度を高めようとしている。文学創作初期、彼の文学王国の中には日本人が登場していない。彼は日本人に頼らず、日本人以外のところに独立の世界を築き、自分の文学の力で民衆を助けようとしていた。

ところが、ベスト騒ぎの隔離生活により、古丁は自分の追求が厳しい社会現実でほとんど役に立たない、また自分の目的がほとんど達成されていないと悟り、文化人としてより広い範囲の活動をすべきだと考えた。つまり、文学以外の何らかの方法で民衆の民度を高めようと考えた。抗日手段を取らない古丁は、大和民族との民族協和も方法の一つと考えていたのだろう。

そして、その時、「大東亜戦争」中の日本の政策は、古丁には日本の変化のように思え、「大東亜戦争」への協力姿勢も積極的なものになっていった。古丁にとっては戦争に協力するのは、単に「満洲国」や日本の勢力に屈したからではなく、彼自身の体験に基づく考え方の変化によることであった。彼にとって「民族協和」は民衆の民度を高める一つの手段であり、彼の「大東亜戦争」への協力はそれに基づいている。

古丁は戦争に協力しながらも、一貫した追求を捨ててはいない。彼の中では、民衆の民度を高めるといふ啓蒙的な一面と戦争協力の一面とは統一されていて、矛盾しているわけではないのである。古丁のような作家を研究する場合は、反動的なのか、愛国的なのか、というような二分法で分析しては、問題解決に至らないのである。「民族協和」という「満洲国」の政策に対応していた古丁には、日中戦争から「大東亜戦争」へと突き進んでいった日本帝国主義の侵略戦争の展開がよく見えず、「大東亜共栄圏」が「民族協和」の実現のように思えたのである。古丁は愛国を貫きながらも、実践的な啓蒙活動の態度をとったことによって、「大東亜共栄圏」という美しいスローガンが少しずつ実現されてゆくように思われ、それに協力していったのである。

(1) 「満洲国」の「満人」作家古丁(一九一四—一九六四)、本名徐長吉(徐突微という名を使ったこともある)は、長春生まれで、一九三二年北京大学に入学。同年中国左翼作家連盟北方支部に加入し、左連北方支部の機関誌『科学新聞』の編集に携わる。一九三三年七月、北方左連の組織部長に就任。八月逮捕された徐突微(古丁)の裏切りにより、方殷等左連の人が逮捕されたとされる。『左聯回憶録』(中国社会科学出版社一九八二年五月)の陸万美「迎着敵人的刺刀尖、堅持戰鬥的“北平左聯”によると、一九三三年七月、左聯常務委員改組の時、徐突微が組織部長となり、まもなく逮捕され、中山公園の“来今雨軒”で記者会見をして共産党と左聯を攻撃した。また、方殷「記一次被出売了的會議」には、「アンリ・バルビュス反戦調査団」の歓迎準備会に、徐突微が特務を連れてきて、それによって方殷たちが逮捕された、とある。その後古丁は故郷の長春に戻り、「満洲国」國務院総務庁統計処統計官となる。一九三七年三月、「満洲国」で月刊満洲社社長城島舟礼の出資により雑誌『明明』(一九三八年九月四巻一期十九号で停刊)の創刊に携わり、一九三九年六月芸芸雑誌『芸文志』(三輯で停刊)を創刊した。一九三七年七月山丁が『明明』に「郷土文芸」と「山丁花」を發表し「郷土文芸」を提唱する。同年十月、古丁が三十日の『新青年』に「偶感偶記並余談」を發表し、山丁の「郷土文芸」の主張を批判する。そのきっかけに「郷土文芸」に関する論争が行われ、次第に古丁をリーダーとする「芸文志派」と山丁をリーダーとする「文選派」が形成されていった。その論争がしだいに出版競争に変わり、数多の文芸作品が

出版され、「満洲国」文壇にかつてない繁栄がもたらされた。古丁の一九三八年五月「城島文庫」叢書として出版された小説集「奮飛」が一九三九年に第四回「芸芸盛京賞」(一九三六年創設)、一九三九年十二月に發表された長編小説「平沙」が一九四〇年に第二回「民生部大臣賞」(一九三八年創設)を受賞した。大内隆雄の日本語訳で「原野」「小巷」が小説集『原野』(三和書房 一九三九年九月)に収録され、一九四〇年八月には「平沙」が中央公論社によって、それぞれ日本で出版された。それをきっかけに「満人」(満洲の中国人)文学が日本で知られるようになり、日本文化人の関心を惹いた。古丁らは「写印主義」「方向なき方向」(古丁が「満洲文学通信」七巻四号一九四〇年四月の中でこう語っている。「私達は文學道としては方向なき方向を主張し、現に居る二十人そこそこの文學人の自主的な個性を生かすやうな發展を期し、『寫印主義』といふ作品一點張り主義で、先づ作品を豊富にすることを念願して居つた譯である。先づ作品を豊富にして、それから各種各様の文學道が自ら生まれて来るであらう。」)を掲げ、日本の文学作品を積極的に翻訳紹介していた。(一九三七年十二月『明明』第二巻三期に日本文学紹介特集発行、中に古丁訳・石川啄木作の『悲しき玩具』などがある。一九四〇年六月『芸文志』第三輯発行。日本紀元二千六百年記念特集がある。中に古丁訳・武者小路実篤作の『井原西鶴』が入っている。ほかに夏目漱石の『こころ』なども翻訳した。「大東亞戦争」が始まってからは、大川周明の「米英東亞侵略史」や吉川英治の「宮本武蔵」なども翻訳。)。

一九四〇年秋、古丁は新京のベスト騒ぎに巻き込まれ、一ヶ月近

く隔離生活を送った。一九四一年十月公職を辞し、友人と芸文書房を開設する。一九四三年十一月芸文書房から満洲芸文連盟の中国語機関誌『芸文志』を発刊する。

(2) 『古丁作品選』には一九四二年までの間、「譚」、「一知半解集」など容易に入手できない古丁の作品が収録されているため、古丁研究に非常に重要である。この点で編集者の仕事が評価されるべきである。従って、本論文は、古丁の一九四二年までの作品の引用はこの作品選に依拠する。ただ、「原野」「平沙」は大内隆雄の日本語訳が出版されているので、この二作品の引用は大内訳に従う。

『古丁作品選』後記に、編集者はこの作品選の編集目的として、「人々が古丁を全面的に知るために、我々はこの本を編集した」と書いているが、「新生」など重要な作品が選ばれていないということは、「全面的に」という言葉を裏切っている。実はこの作品選には、古丁の愛国的な一面を表している作品しか選ばれていないし、「古丁は愛国抗日作家だ」と主張している馮為群の「評古丁の文学成就」が代序として掲載されている。ここから『古丁作品選』の編集者は、二分法で古丁を見ていて、しかも「愛国的、啓蒙的」な一面のみを主張していることが分かる。

(3) 鉄峰の原文章を私は直接読んでいない。馮為群「関於就事論事答鉄峰」(『古丁作品選』前掲書)には、鉄峰が古丁の政治的立場が反動的だと述べている。その理由として「偽官吏になったこと、大東亜文学者大会に参加したこと等々の事実と、「盧溝橋事変」の後一九三七年九月に書いた「日本対華真意」、一九四二年一月十四日『大同報』「文学」週刊に発表した「沈潜と胎動」があげられている。馮

為群の反論の中で、古丁のこの二篇については、「特殊な歴史条件下で、文章を書くために、そのように調子を合わせなければならぬ」とこともあると言う。私はこの二篇を直接読んでいないので、これについては今後の課題としたい。

(4) 岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』研文出版 二〇〇〇年三月 六八頁

(5) 『芸文志』第四号 芸文書房 一九四四年一月 一九四四年第二回大東亜文芸賞次賞受賞作

(6) 岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』前掲書 八一―八二頁

(7) 雑誌『芸文志』には一九三九年六月文芸雑誌として創刊されたもの(三輯で停刊)と一九四三年十一月芸文書房から満洲芸文連盟の中国語機関誌として発刊されたものがある。

(8) 「山海外経」は一九四五年七月『文友』第五卷第五期に掲載。岡田英樹氏の日本語訳が二〇〇五年七月『植民地文化研究』(不二出版)第四号(一四六―一五八頁)に発表された。『文友』について手元に資料がないが、岡田氏によると、大阪毎日新聞社が編集し、東京日日新聞社とともに発行した中国語総合雑誌『華文大阪毎日』の姉妹版として一九四三年五月一日に上海で創刊された。

(9) 一九四四年以後の協力姿勢を示した作品が別にまたある。例えば、一九四四年七月の『芸文志』第九号に掲載された「西南国境」や、熱河視察の感想文「西南雑感」がある。本論は「西南雑感」等を考察対象にしない。それは今後の課題にする。

(10) 辛嘉作、大内隆雄訳「古丁に就て」『満洲浪漫』第五卷 『満洲

浪漫』第五輯 株式会社ゆまに書房 二〇〇二年七月 一六頁

(11) 「一知半解集・《迷途的羔羊》門外評」一九三六年十二月『古丁作品選』七七頁

(12) 「原野」大内隆雄訳『原野』三和書房 一九三九年九月 一四頁

(13) 「奮飛・昼夜——一個無詩的詩人的日記」一九三七年九月『古丁作品選』前掲書 二三四～二三七頁

(14) 辛嘉「古丁に就て」前掲書

(15) 「奮飛・皮箱」一九三七年四月十日 『古丁作品選』二二〇頁

(16) 大内隆雄訳『平沙』中央公論社 一九四〇年八月 九四～九五頁

(17) 矢部貞治編集『近衛文麿・下』弘文堂 一九五二年 一八二頁

東亜連盟運動について…一九四〇年五月繆斌が北平（北京）で中国東亜連盟協会を設立し、自ら会長となる。これは、中国の日本占領区の東亜連盟運動の始まりとなる。同年九月広東で中華東亜連盟協会が設立され、林汝珩を会長とする。また同年十一月周学昌が南京で東亜連盟中国同志会を設立した。一九四一年二月各地の東亜連盟協会の代表が南京で会議を開き、東亜連盟中国総会が成立。会長は汪精衛。

(18) 浅見淵『満洲文化記』国民画報社 一九四三年 一三八～一三九頁

(19) 巖谷大四『非常時日本文壇史』一九五八年中央公論社三〇頁

(20) 勁草書房 一九七一年六月

(21) 青木書店 一九九五年六月

(22) 櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』一九五五年六月 青木書店 二八四頁

(23) 議題…大東亜精神の樹立 『日本學藝新聞』第一四三号 一九四二年十一月十五日

(24) 同注(23)

(25) 同注(23)

(26) 同注(23)

(27) 朝鮮半島での深刻な民族差別を背景に、朝鮮人が日本人に劣っていないという意気を込めて李光洙は、このような日本人にも見られない激しい発言をしたと考えられる。

(28) 「大東亜文学者大会の収穫」『満洲芸文通信』第十二号 一九四二年十二月 満洲芸文聯盟発行 五頁

(29) 古丁「満洲文学の基調」『文學報國』第三号 一九四三年九月十日

(30) 第三分科会 翻訳委員会の設置 古丁『文學報國』第三号八面 一九四三年九月十日

(31) 古丁「満洲文学通信」『文学界』第七卷四号 一九四〇年四月 一七〇～一七一頁

(32) 大内隆雄「満系は翻譯を求めている」橋樑編『満洲評論』第二十八卷第三号——復刻版——龍溪書舎 一九七九年 二九～三二頁

(33) 日本語など言語についての古丁の発言が別にある。

一九四二年十月二十八日の『朝日新聞』夕刊一面に「日本は太陽」というタイトルで古丁の発言がある。中に「今に日本語が東亜語となり、東亜文学就中日本文学が世界に光彩を放つであらう……」が

ある。それを尾崎秀樹氏が「植民地文学の傷痕」(『旧植民地文学の研究』二八頁 勁草書房 一九七一年六月)に「他國語には日本語への翻訳が附くが、日本語には一切翻訳がつかないと決定され、その線で第一回大会は推し進められた。この日本の決定にそう形で参加者の一人(満州代表)は『今に日本語が東亜語となり、東亜文学就中日本文学が世界に光彩を放つてであろう』というように取り上げている。ここでいわゆる「東亜語」は当時流行っていた「世界語」に対抗して提出されたのだろうか。

また、「満洲文學通信」(『文学界』前掲書 一七一頁)にこう書いている。「林房雄氏は五十年後に日本語で読み書きをするであらうと言はれた。満洲國では、満洲語(即ち支那語)、日本語、蒙古語の三つが國語であり、今の所は、結局何語で書いても良い譯である。(略)他國語で自國人の生活感情なり思想なりを表現し得ないと言ひ切れない迄も、自分のことばで自分のことを書くのが寧ろ一種の常識であらう。」このように、古丁は中國語で書くという点でもっとも譲らない姿勢を見せている。

また、翻訳として、それまで夏名漱石の『こころ』(単行本)や石川啄木の『悲しき玩具』(『明明』日本文学紹介特輯 一九三七年十二月)などを翻訳してきたが、一九四二年以後、純文学作品ではないものの翻訳が目されるようになる。大川周明著『米英東亜侵略史』(古丁訳 興亜叢書 芸文書房 一九四二年)、吉川英治の『宮本武蔵』(古丁・爵青等訳 『芸文志』第八号 芸文書房 一九四四年六月)などがある。『宮本武蔵』の翻訳について爵青がこう語る。「剣術の中に日本の武士道の精神が入っていて、剣客の宮本武蔵には、

国民的な英雄として従来日本民衆が憧れている。」また、「日本の国民的な英雄は、即満洲民衆の英雄である。それで、満洲民衆も宮本武蔵によって大勇猛心を引き出すべきである」(爵青・田郷「談小説」『芸文志』第十一期 一九四四年九月 芸文書房)。古丁らは、これらの作品の翻訳によって、日本精神と文化を「満洲國」に伝えたいと思われる。

- (34) 大内隆雄訳「第二回大東亜文學者大會より帰りて・文學者の決戦」『満洲公論』第二卷十一号 一九四三年十一月 満洲公論社新京
- (35) 山田清三郎「転向記・嵐の時代」理論社 一九五七年九月 一七二頁

(36) 「満洲國執政宣言」

(37) 「満洲國建国宣言」

- (38) 一九四一年五月、「譚・談三 夢境(文学)」『古丁作品選』一〇六頁

(39) 「奮飛・自序」『古丁作品選』一五三頁

(40) 「新生」の中で古丁は日本人を「日系」、中国人を「満系」と用いているので、本論文では古丁の用法に従うことにする。

(41) 古丁は一九三二年北方左連に入り、一九三三年七月に組織部長就任。同年八月に方殷等逮捕事件があった。一九三二年十一月魯迅が北平を訪れ、中国大学などで「北平五講」を行う。魯迅の講演の手配、連絡などは北方左連がやっていたので、古丁は魯迅に会ったことがある、少なくとも直接魯迅の講演を聴いたことがあると考えられる。

(42) 「平沙・自序」『古丁作品選』前掲書 一九四〇年 三九一頁

- (43) 「奮飛・自序」『古丁作品選』前掲書 一九三八年二月 一五五頁
- (44) 「新生」『芸文志』第四号 芸文書房 一九四四年一月 二〇四頁
- (45) 「新生」『芸文志』前掲書 二一四頁
- (46) 古丁「万葉源氏と載道言志」『滿洲日日新聞』一九四二年十二月三日 大村益夫・布袋敏博編 旧「滿洲」文学関係資料(一) — 『滿洲日日新聞』『京城日報』二〇〇〇年三月 一九九頁
- (47) 張毓茂主編 瀋陽出版社 一九九六年
- (48) 例えば『万世流芳』(滿洲映画と上海中華電影股份有限公司、中華聯合製片股分公司的合作で、一九四三年五月上海で公演された)、  
『林則徐』(大同話劇団 一九四二年)
- (49) 全文・今夕復何夕?我乃黃帝子、君乃大和裔・君愛大和子、我愛黃帝裔。